

文左衛門浮世日記

秋野 成道

門殿に酒を注ぎ、改めてお引き立てを願った。
松井殿が仰るに、

「大きい声では言えぬが、このお役目は暇でのお。あまり気張ることはにやでよ」

大岡殿も、

「そうだ、気楽にやることじゃ」

と言われて大いに安心した。

だいぶ飲んだ頃、松井殿が

「ぬしゃ、御本丸をもう見たか」

と尋ねる。

「いえ、まだでござります」

「じゃ、案内するで見物に行こう」

ふらつく足で御本丸座敷を見物させてもらった。洞房、回廊、書院、台所、深殿、曲屋、幽間、目も覚むるばかり、まことに妙を極めていた。さらに御天守に登って尾張の夜景を見た。城下には既に灯の気はないが、月夜の美しい眺めであった。

翌朝、御番所を無事次のお役目に引き継いだ。

同十九日

妻お慶産気づくが産せず。

拙者、朝日文左衛門重章と申す御三家尾張藩藩士であります。親の跡目を継いで、城の警備をいたす城代組御本丸御番として九日に一度登城いたします。それ以外は気ままに過ごせるのであります。閑にあかして丹念にしたためた日記がこれであります。

元禄八年

一月十六日

同輩の三人分の弁当と酒を持って初めてのお勤めに出る。これはこの役目の慣例で、三人がかわりばんこに他の同輩の弁当を持参する決まりである。御番所の足軽七名にも振舞うので煮物を多くした。この弁当をつまみにして、晩酌のための酒も持参するのである。これが結構な荷物になる。中間に持たせて登城した。晩酌の時に、先輩相番の松井勉右衛門殿と大岡又衛

二月十三日

晴天、非番である。この日は、友の加藤平佐と前々からの約束があった。

「十日から二十日まで、真福寺で操りがあるがや」と加藤が言う。

「わしや操りがでら好きじや。おみや非番はいつじや」

「わしや二十日以外は非番じや」

「わしは十三日が非番じや」

「ほうたら、一緒に行こみや」

「わかった。楽しみにしよとれよ」

武士は芝居見物が禁止されているのだが、密かに操り浄瑠璃を見物に行くことに話が決まったのであった。

楽しみにしていた操りであつたが、席が舞台から遠く、セリフが聞き難い。

「何を言っているのかまったく分からんぎや」

「ほうたら出よう。隣の小屋で狂言やつちよる」

隣の歌舞伎狂言を見た。札銭十八文。出し物は「山城国北白川物語四番続き」であつた。

三月十日

巳の刻、妻お慶安産。

同月十六日

娘七夜の祝儀で親戚一同を招いた。

汁潮鴨独活銀杏、鱈いか、さより、はじかみ、刺身なよし、かんでん、いり酒、香の物、煮物かまぼこ、いもたけ、山のいも、さざえ、さんしよう、酒の肴、焼鯖、粕漬ふな、なよし等々を振舞つた。

肴代、産着代として原右衛門殿、覚右衛門殿、平兵衛から金老分いただく。今夜来られぬ面々からも祝いの品が届いた。使いの者には祝儀を奮発した。

四月十八日

予てからの計画で、父と従弟の猶右と三人で伊勢参りに出かけた。

父は前々から、

「一度はお伊勢参りをしたい」

と言つていた。拙者は、

「隠居なさられたら参りましょう」

といい加減なことを言つておいたが、いざ隠居されると、時々拙宅に来て、

「お伊勢参りはいつかのお」

とせがむのであった。親父殿と一緒にでは面倒だが、連れて行くことになった。

熱田より船に乗り午後桑名に着き、神戸に泊まった。翌日未明に宿を出て歩く。津より松坂までは駕籠を雇った。夜、新茶屋に泊まる。

翌日も快晴。夜明けとともに宿を出て、外宮、岩戸、内宮を奉拝した。

伊勢は想像していたよりも俗な処である。特に岩戸の前には数軒の茶屋があり、茶汲み女が下卑た声で客引きをしていた。内宮のおほらい町でも御師の女房たちが客引きをしていて、想像していた厳肅さというものが無い。しかし親父殿は、

「これで念願がかなった。いつあの世からお迎えがきても悔いはないだわ」

と言う。父の念願が叶ったので、次は拙者の念願を叶える番である。

「猶右と鳥羽まで出かけて参ります」

と偽って、父を宿に残して翌朝早く宿を出た。伊勢で興行中の村山平十郎の歌舞伎見物に行くのである。

折角なので、札銭が「家賃より高い」と言われる棧敷に登った。ここに陣取り芝居茶屋から酒とつまみをとる。豪華絢爛、尾張ではこんな芝居を見たことがない。役者が何と数十人も出るのである。まるで仙境の花、秋の紅葉を見るようである。都太夫は歳の頃十二三ばかり、まさに神業とも思えるほどの芸である。後世畏るべし。

昼には雨になった。尾張あたりの芝居は屋根がないので、雨が降ると中止になる。ここは立派な屋根が葺かれていたので濡れることがない。良き一日を過ごした。

五月二十八日

晴天。悪友加藤とともに釣りに行くと嘘をついて、茶屋に釣り道具を預けて操り浄瑠璃を見に行った。竹本義太夫。

夕方家に戻ると、隠居した親父殿が怖い顔をして待っていた。

「おみやあどこに行つとつた」

と詰問する。

「加藤と釣りに行つとたです」

「ちようらかすでない」

「いえ、誠にございます」

「隣の渡辺殿の中間が、お前らが杉村の芝居に入るのを見たと言つとる」

「・・・」

「武士が芝居を見るとは何事であるか。かような悪所に通うのはご法度であるのを知つちよるな」

「はあ、加藤に誘われたで、ついつい」

「たあけ、何が加藤だ。これが初めてではないじゃろ」

「・・・」

「何度その操りを観たのじゃ、正直に申せ」

「二度ほど」

「嘘こくでねえ」

「はあ、実は今日で四度目でした」

「ううう、四度とな。同じ狂言を四度も観たのか」

「狂言ではございませぬ。どえりや良い操りで、人形の所作はまるで人のようでございます」

「愚か者、その浮ついた性根を入れ替えねばならん」

と、その後延々と武士の心得について説教をされた。妻子の前で恥ずかしい思いをさせられたのであった。

六月十四日

城内では鉄砲撃ちが流行っている。同心らも鉄砲を習いだした。鉄砲を習うと上司の受けが良いのである。

拙者も皆にならい、毎日矢田の鉄砲場に行くようになった。何度やっても当たらぬ。

六月十八日

昼過ぎに山崎川に魚どりの殺生にでかける。江戸ではご禁制だが、こちらでは釣りをしたり鴨を食したりしても、特段のお咎めはない。

この川ではもろこが釣れる。もろこは小さい魚なので、魚籠に移す時に手から滑って逃げられることがある。

「こら待て」

と言つても元の川へ逃げてしまうのである。

十月朔日

江戸からの触れ状が来た。金銀を吹き直すとのことである。

「どうも御上の内情が苦しいらしい」

「当藩も公方様の江戸屋敷への御成りで、どえりや金がかかったそうじゃ」

「どこも借財で火の車らしいげな」

と皆で噂した。

金銀吹き直しで、後日諸掛かりが上がつて困ったこ

とになった。

元禄九年

二月十九日

午前雨、夜曇り。この夜は拙者が弁当の当番であった。汁に煮物、山のいも、梅手、ぼら、浜焼、香の物、酒を持参。

四月二日

鉄砲撃に行く。だいぶ上達した。二十発中二つ当たる。

五月六日

朝、加藤のところに行って河豚汁をよばれた。

夜は狂言を見に行く予定であったが、前公方の家綱様の十七回忌のご法事があるので、残念ながら鳴り物が禁止された。

六月十二日

江戸よりの噂では、中野の十六万坪の犬小屋には、

数万匹のお犬様を収容しているらしい。犬の飯は一日五百升と聞いた。その他の犬小屋を合わせると、なんと一年に九万八千両かかるらしい。

井上文右衛門が言うには、

「松屋半左衛門と申す藩士が、貧窮のために書き置きを残して逐電したそうじゃ。十石を減俸されたので暮らしがたなくなつた」

と。半左衛門の父半九郎も、一昨年貧しきが故に自殺をした。三十五石五人扶持でさえ貧しさに苦しんでいた。その上十石を減俸されて、半左衛門もいよいよ行詰つたらしい。

六月三十日

藩より博打御停止の儀が出された。これで何度目かであるが、拙者だけでなく母御も博打好きである。

「母じゃ、どうする」

「こんな面白いことやめられるか。こじんまりやつとればええんじゃ」

翌々日佐久間宅で花カルタをやつた。

九月十一日

終日雨降る。拙宅に小菅猶右衛門と井上文右衛門が

来て一晩中碁を打った。小菅と十番、七敗三勝。井上とも十番、十敗。

「拙者はどうも腕があがらぬ」

「何事も修行だ。毎日井上家や本因坊家の棋譜を見て並べるじゃ」

井上は囲碁四家の井上家と繋がりがあるので、兎に角強い、うまい。最後は二目置かせてもらったが、それでも勝てぬ。悔しき事限りなし。

二人は夜明けに帰る。

八月十八日

芝居は朝から始まる。

「はよ起きて飯をたけ」

と、日の出前に下女を起した。眠気まなこの下ぶくれたした顔で、

「どえりや早く起きてどこに行きなさる」

と不満げに言う。

「つべこべ言うな。これから早朝の稽古に出かけじや」

夜明けに家を出て、橘町で操り浄瑠璃を観る。木戸番の声高き呼び込みを聞くと、心うきうきするのである。札銭四十一文、場銭七文なり。

十月二十五日

浜嶋伴右衛門の召使山田惣助の処刑がある。

「今日は火あぶりらしい。わしゃ火あぶりを見たことがない」

「拙者もじゃ」

ということ、能瀬彦之丞と見物に出かけた。

惣助は朋輩の者から盗みを働き、その上主家の長屋に放火したのである。昼頃に火あぶりの刑が処された。見ていて気持ちの良いものではなかった。

元禄十四年

正月一日

拙者は前年御本丸御番より、ひよんなことで御畳奉行に出世した。鉄砲撃ちは今下火になっているが、拙者は暇なので時折撃ちに行く。それを鉄砲好きのご家老竹腰山城守様が見て、

「殊勝である」

と、拙者を御畳奉行に推挙してくださったのである。この御役は城内の畳の傷み具合を調べるだけなの

で、配下の者三人でこと足りる。そのため拙者にはすることがない。偉くなって暇な事従前以上。

御役料四十俵の加増を賜ったので、広い屋敷に引越すことができた。ここで新年を迎えた。

三月十四日

江戸御殿中において、播州赤穂藩浅野長矩殿が高家吉良義央殿に切り付けたらしい。

三月二十日

浅野殿の件、さまざま噂が流れてきた。

浅野殿は、

「この間の遺恨覚えたるか」

と言って切り付けたらしい。その遺恨がいかなるものか、残念ながら未詳。世に伝える処では、吉良殿は賄賂を好んだらしいが、浅野殿は拒んだと云々。また浅野殿は短慮で、詰まらぬことを根に持ったと云々。

切り付けられた吉良殿は、治療中はやつれた様子だったが湯漬けを二杯食べると元気を取り戻した。

一方、同日田村右京太夫様の屋敷に幽閉された浅野殿も、湯漬けを二杯食して顔色が良くなった。

六つ過ぎ、田村邸に御公儀の検使役が来て上意を伝

えた。出会之間に面した庭に筵を敷きその上に畳と毛氈が敷かれた。浅野殿は袴に着替え作法通りに切腹された。

検使役は柳沢出羽守保明様に切腹の詳細を報告した。切腹の上意も実は柳沢様が決めたと噂されている。

四月十九日

浅野大学長広殿閉門。赤穂藩は取潰し、城は明け渡された。

元禄十五年

正月五日

建中寺に初詣に出かけたが、前夜飲み過ぎて二日酔いであった。

三月三日

藩主吉道様の姫君お迎えとして、成瀬修理御側同心頭をはじめ、総勢二百人あまりが近江路を京に向かった。輔姫様である。

吉道様は公方様となられてもおかしくない方であ

る。それゆえ、高貴な方を姫君として迎えられるのである。

六月六日

江戸にてかような落首があつたと聞く。

村雲の九条のけさをぬぎずて東下る身の尾張

かな

案ずるに吉道様の姫君は京の九条閑白のご息女であらせられるので、尾張に下向するのをかように皮肉つたらしい。けしからん落首であるが上手いものだ。

また、

出羽出たか柳を松に植えかねて美濃に成りては

すえは雨かな

これは柳沢出羽守保明様が公方様お気に入り、松平姓と將軍の名の一字「吉」を許され、松平美濃守吉保様となったことを皮肉つたらしい。才あまつて、徳望の乏しい方のようにである。

十月二日

故藩主綱誠様のご側室本寿院様は、現藩主吉道様の母君である。朋輩たちとこんな話が出た。

「本寿院様はかなり奔放な方らしい」

「わしもその噂聞いたわさ。町人や狂言役者でも男前なら見境なく召して淫戯しちよるらしい」

「家老も御公儀の御耳に入るのを恐れておる。世間には食姪絶倫と聞こえておるそうじゃ」

十二月十五日

昨夜、江戸にて浅野内匠家来四十七人、亡主の怨みを報ずると称し、吉良上野介の首をとり、芝專^(マコ)岳寺へ立ち退く。

十二月十九日

浅野家家臣片岡源五右衛門は尾張藩熊井十次郎の子である。よつて十次郎は謹慎。中根清太夫も従弟であるため自ら謹慎した。

元禄十六年

二月五日

大石内蔵助殿の討入口上が密かに家中に出回っている。大事な所を書き写した。

去年三月、内匠儀、伝奏御馳走の儀に付き、吉良上野介殿へ意趣を持ち、御殿中に於いて刃傷に及び候。時節場所を弁えざる働き、不調法至極に付き、切腹仰せ付けられ、領地召し上げられ候儀、家来共まで畏れ入り存じ奉候。右喧嘩の節、上野介殿討ち留め申さず内匠末期残念の心底、家来共忍び難く、今日上野介殿御宅へ推参仕り候。偏に亡主の意趣を継ぎ候志まで御座候。

以上
元禄十五年十二月 浅野内匠頭家来 大石内蔵助

浅野内匠家来四十七名、切腹を賜つたと伝え聞いて、拙宅に小菅猶右衛門、井上文右衛門、能瀬彦之丞、加藤平左が集まつた。

「御恐れながら、この御沙汰には納得できぬわさ」

「わしも納得できぬ」

「浅野家の家臣は武士の鏡じゃ」

「げな。江戸ではどえりや人氣らしい。大石内蔵助殿が謹慎されている細川様の高輪下屋敷には、毎日大勢の町人や侍が見物に出ているそうだ。少しでも姿が見えると、やんややんやの喝采らしい」

「人出が多いので屋台まで出ていると聞いた。連日道をふさぐほどの人が来ているので、江戸町奉行配下の

下馬廻り同心が毎日出て、下屋敷前の交通整理をしておるとか」

「わしも江戸にいたら見物したがや」

「それを切腹させるとは、世論に逆行しておる」

このように拙者や小菅、井上、能瀬は口角泡を飛ばして憤っていたが、加藤は何とも言わぬ。

「加藤、おみやはどう思う」

しばらく加藤は黙っていたが、こう語った。

「わしもこの御沙汰にはじめは立腹した。じゃが、儒者の叔父からこう諭された。赤穂の浪人は長い間、筆舌に尽くせぬ苦勞をし、ついに志を達することができたのである。主の仇を打つたので、今はこの世に思い残すことはない身の上である。元より死を覚悟しての仇討ちであった。だから命乞いなどせず、御法通りの御裁きを仰せつけられるようにと願ひ出ているのである。彼らの家臣に望む大名もあるやに聞いておる。じゃが、もし仮に命を助けたところで、彼らがこれから二君にまみえる筈もあるまいし、またそうしなければあたら忠義の者たちを餓死させる外はない。『鷹は死しても穂を摘まず』という例えもある。御法通り武士道を立てさせて、切腹させるほうがよろしいのじゃ。そう叔父上は申しておった」

われら三名はそれを聞いて言葉がなかった。

三月二十日

浅野家家臣切腹。

熊井十次郎の謹慎もお許しが出了。中根清太夫も本日より登城。

十一月二十二日

昼九ツ、大きな揺れを感じた。座敷から出ようとしたが、何かにつかまらないと立っていられない。このところ地震が多いので、いつものようにすぐに止むかと思つたが、異常な揺れ方である。なかなか揺れが治まらない。家の者が心配なので、揺れるなかを這つて居間に行くとき妻は娘を抱いて柱にしがみついていた。下女もうづくまつて柱に抱きついている。

「ここにいると危ないで、庭に出よう」

そう声をかけて座敷を這いつくばつて庭に出た。

庭の中央にある牡丹の木につかまつて暫く様子をみた。立つてられぬので、木の下にしやがみこんだ。地面が上下に揺れ、牡丹の花が落ちてきた。

少し治まるかと思うと、揺れは断続的に何度も起こつた。隣家の中野殿のご家族が家の中で震えているの

が見えた。

「中はあぶないので、こつちにいりやあせ」と言つて避難させた。

四半刻ばかりして揺れは少し治まつた。

夕方、火を使うと火事の恐れがあるので、米櫃に残つていた飯に水をかけて食した。城に行けばなにかの沙汰があるかも知れぬと思ひ、行く。

道々、多くの屋敷や町屋が潰れているのを見た。何とか逃げ出した町人は、三ノ丸前の評定所のあたりに大勢集まつていた。女子どもは念仏やお題目を唱えていた。大八車に怪我人を乗せている者もいた。

御城内では、竹腰志摩守様邸の門は半ば崩れていた。東照宮の屋根も傾いでいた。

城内で知つた者に誰彼となく尋ねたが要領を得ず、帰宅。

江戸では尾張とは比べものにならない程の大地震であつたらしい。

江戸中は申すに及ばず、近郷もおびただしく破損、人馬損死したらしい。江戸中の武家屋敷、町屋ともに土蔵はおおかた崩れ、下町より築地辺では、穴蔵より水湧きだし水害も起こつた。

江戸城御本丸、御櫓三十七ヶ所が大破損した。浅草観音も崩れ、神田明神も崩れた。芝増上寺は残らず崩壊した。永代橋には津波が打ち寄せ、潮は七度進退した。市中は逃げ惑う男女の悲鳴に満ち満ちていたという。

後日

毎夜地震ゆり止まず。皆少しの安堵もできず。薄氷を踏むがごとき日々である。

江戸では所々の寺社で炊き出しが始まったらしい。しかしながら余震は未だ止まず。

箱根山も崩れ、川崎、金河、程ヶ谷、戸塚、平塚、藤沢、小田原峠までおおかた崩れ、人馬過半死すという。

安房上総では津波で大方の田畑ともに損じ、人馬ともに多く死す。

伊豆御崎にも津波があり、御番所など皆水没したらしい。

就中、小田原の被害は前代未聞であった。当日の朝甚だ暖かく、無数の魚が渚に流れてきたので、近隣の者は我も我もと拾いに出た。その夜である。丑の刻に大地震に見舞われた。小田原城下は申すに及ばず、城

中までことごとく倒壊した。

さらに悪いことに、城から出火して瞬く間に城下に広がった。武家町人、旅人、牛馬鶏犬に到るまで焼け死んだ。その数二千ばかりかと。生き残った者も、引き続き押し寄せた津波でことごとく海底に死す。当藩の小田原御宿の亭主金左衛門は、幸いにして妻子を引き連れて逃げ出すことができた。文字通り丸裸での避難であった。家財など持ち出せる者は一人もなかった。

同月二十三日

諸国の地震、津波、火事による死傷者二十二万六千余人であったよし。

親父殿来たりて、近隣の状況を告げる。

「渡辺殿の処は柱が潰れてもう住めぬ状態だ。山内殿の処は全壊した。わしの処は外壁が崩れ、屋根が少し傾いたが幸い何とか住むことができる」

「拙宅も所々傷んだ個所がございますが、無事で幸いです」

「それは何より。江戸や近郊では大勢が亡くなった。かろうじて生き残っても、全てが灰燼に帰し、残っているのは青空だけらしい。それを考えたら、生活が苦

しくとも何とか凌げる我等を幸せと思わなければならぬ」

これからは贅沢、遊興はやめようと思う。

十二月九日

諸物価が値上がり、一両で米九斗しか買えぬ。

元禄十七年

一月元旦

浅間山噴火。

三月十三日

元禄改め宝永となる。

能『道成寺』を観る。木戸銭は以前の倍になっていた。諸掛かり高騰、木戸銭まで値上がり。

同月晦日

拙者は御畳奉行として数年に一度、畳の買い付けのために京・大坂に出向く。二カ月程の旅であるが仕事は数日で済む。それ以外は御用商人の接待で、茶屋遊

び、芝居見物で過ごすのである。

今回の上京はなんと言っても、今大坂で評判の近松門左衛門作の操り「曾根崎心中」を観ることである。これを心待ちにしていた。

在坂中に五度ほど観に出かけた。何度観ても見飽きぬのである。

此の世のなごり 夜もなごり

死に行く身をたとふれば

あだしが原の道の霜 一足づくに消えて行く
国に帰るまでもう一度観に行こう。

(参考)

『朝日文左衛門 鸚鵡籠中記』(雄山閣、二〇〇三年)

『元禄御畳奉行の日記』(神坂次郎、中公新書、一九八四年)

『赤穂浪士 忠臣蔵の真相』(三田村鳶魚、河出書房、二〇一〇年)